

君に似た雨

浅雪ささめ

僕の頬に雨が一滴。ぽつんと落ちた。

夕べから降り続いているパチパチとした雨が、あまり舗装されていない地面を打ち付けている。天気予報は向こう一週間雨。

本格的に梅雨入りしたと、この前テレビでストリートヘアの人気お天気キャスターが言っていた。六月に祝日がないのも憂鬱だ。いっそのこと「梅雨休み」を作ってほしい。沖繩はもうすぐ梅雨明けするらしいから、とてもうらやましく思える。

まあ、天候のことなど僕にはどうしようもなく仕方のないことだが、最近はずっと雨ばかりでいやになる。長靴を履いて雨を楽しんでいた小学生の自分は、もうどこかに忘れてきてしまったようだ。水溜まりを見るだけで嬉しい気持ちになっていたのは、消えつつある懐かしい記憶。

学校帰りのバス停で一人。やむ気配は微塵も感じない。激しい雨の中、僕はバスを待っていた。

東京とか都会の方に行けば、スも電車も五分に一本くらいあると聞いたことがあるが、こんな田舎に来るバスなど一時間に一本しかない。

だから一つでも逃してしまおうと、学校には遅刻するし家に帰るのも遅くなるし困ったことになる。別に帰りが遅くなつたからって、親に怒られるわけでもないが、登校の時に逃すと確実に遅刻してしまうのだ。

学生が使うのだから、もう少し本数を増やしてもいいと思うのだけれど。せめて三十分一本とかさ。贅沢を言えば十五分に一本は欲しい。

学校から傘を差してバス停に向かう途中、どんどん小さくなっていく、花火のようなバスのブレーキランプを見た。だからこうしてバスを待っているわけなのだが、こんな天気の中で一時間も待つとか地獄でしかない。

幸いバス停に屋根はある。スマホをいじっていたら一時間なんてあっという間だろう。丁度ソシヤゲのイベントが始まった頃だ。

ベンチに腰掛けていると、僕の通う学校の制服を着た女子に、遠慮がちに声を掛けられた。リボンの色からして同年代か。どこかで見たことあると思った。多分、学校の廊下ですれ違ったとかだろう。

「ねえ、ここいいかな？」

耳を抜ける女子の透き通るような声。僕はどうぞと、席を一人分とちよつと空ける。

ちらつとしか顔を見ていないが、かなり端整な顔立ちだ。要するに可愛い。それも、一回見れば忘れられない可愛さだ。なるほど。見たことがあるのは、廊下ですれ違ったとかだろう。

ありがとう。そう言つて僕の隣に座り、尋ねてきた。

「ねえ、次のバスいつ？」

「えーと。だいたい一時間後だね」

僕はスマホの時計を見ながら答える。

「ええ!! うそでしょ。じゃあ、さつきいったばかりじゃん！」

立ち上がりながら本当に驚いたように声を上げる彼女に、僕の方が驚いてしまって、彼女の方へと顔を向ける。目が合ってしまったって少し気まずくなり、すぐに視線を下げる。

と、目に入るものがあつた。

透けていたのだ。

この大雨の中を走つてシャツが透けてしまい、下着が見えていたわけではない。いや、シャツも濡れて透けてはいるのだが、僕が言いたいのはそこではない。

そう。いま重要なのはそこではない。

僕の目は今、胸よりも下に向いている。と言つても、スカートが透けているわけでもない。

足が透けているのだ。

「ちよ、あの、足透けていませんか？」

大丈夫なのか、それ。もしかして、聞いてはいけないものだったのか？ 他人には言えない病気とか。秘密なんて誰にでもあるものだし。だったら謝らないとな。と構えていたのだが、

「あー、そうだよー。まあ、死んじやったわけでもないんだけどね」

と軽い調子で言うものだから、僕は肩透かしをくらつ

た気分だ。透けているだけに。

幽霊。その言葉が僕の頭の中を巡る。僕の語彙力がな
いからかもしれないが、それ以外の言葉は見つからな
かった。彼女がごく普通の女の子だったら、今のシチュエ
ーションには興奮するものだろうが、生憎と僕は今
混乱していてそんな余裕はない。

「その、なんだ……。触れるのか？」

バスの運転手が聞いたたら、止まらずに走り去っていき
そうな台詞が口をついて出た。

うーん、と手を口にあてる。かわいい。

「今なら触れるのは膝より上かな」

触ってみる？ とか聞いてくる彼女に、恐る恐る手を
のばす。同級生に見られたら終わるなんて思った。

スカートと制服のちよつとの隙間。

彼女の柔らかいおなかにふれながら、

『今は』ってどういうこと？』

と聞いてみた。

「こうなったのは最近なの。最初の頃は足先だけだった
んだけど、段々上の方まで透けてきてるの。今じゃこん
なくらい」

そう言っただけで彼女はスカートをたくし上げた。試しに僕
が膝の下、脛あたりに手を伸ばすと、すつ、と通りぬけ
た。恐ろしい感覚だ。何かが腕にあたっている風でもな
い。しかし、透けていても足は見えているから視覚と触
覚があわなくて、もどかしい感じ。背中がムズムズする。
例えるなら、舌がしつくりくるだろうか。そこにある
けれど決して触れない。最近では触覚さえも再現するとか
言われているが、そこに関して今は目をつむっておく。

「ね？ 本当でしょ」

「そ、そうだね。うん」

もう認めるしかなかった。目の前の美しい彼女は幽霊
なのだ。いや、死んでいないなら幽霊ではないのか？ 正
確にはなんて言えいいのか分からない。

「それ以外はいって普通の女の子だよ」

あまり気にしていないかのように目を細めて笑う彼女。

このときから僕はもう彼女に惹かれ始めていたのかも
しれない。

それからバスが来るまで色々なことを話した。

彼女の名前は遠野風とのおのなぎといった。確か前のテストで学年
一位がそんな名前だった気がする。僕なんか下から数え
た方が早い所に位置するから、月とすっぽんってやつだ
な。

「気軽に風って呼んでね」

「うん。じゃあ僕のことも悠真ゆうまでいいよ。よろしく、風」

「分かった。あ、ほら、バス来たよ。乗ろっか、悠真」

ほとんどの生徒は僕が乗り逃してしまったバスで行っ
たようで、車内には僕と風、あとは数人の老人が座って
いるだけだった。風が二人掛けに座り、僕は傍らで手す
りをつかむ。

「悠真も座ればいいのに」

不思議そうに聞いてくる風。あいにくと僕にそんな勇

気はない。

「すぐだから大丈夫だよ」

「そっか」

車内では何か話すでもなく、目が合っっては少し笑って
そらす。そんな繰り返し。

風の降りるバス停の方が先だったから、またね、と言
ってそこで別れた。

また明日会えたらいいな。そんな風に思う。そんな意
味を込めてのまたね。淡い期待とともに電車で揺られる。

その日から毎日、バス停で会おうと風と話をした。ある
日はバスを一本遅らせたり、またある日は学校からバス
停まで一緒に帰ったりもした。ちよつと恥ずかしかった
けれど、相合い傘もした。

一日、一日だと気づきにくいのが、確かに少しずつ風の
透けている部分が多くなっていく。膝から腰、へそ、気
づいた時には透けている部分のほうが多くなっていた。

毎日「今日はここからだよ」と言っ、恥ずかしげも
なく服をまくり、境界線を見せてくる風には正直戸惑っ
た。そんな僕を見て風は笑う。

またある日、透けた部分から手を上げていくとどうなるのか、という僕の質問に風は「内臓に触れるわけじゃないよ」と言った。何か固く平らなものに当たただけだよと。実際試してみると、そこから下は体から真つ二つに切り離されたようなそんな感じだった。

「ね？」

と笑う風はとても愛らしかった。

学校では別のクラスだし、廊下ですれ違っても挨拶くらいしかしなかったが、毎日バス停で、バスの中で、たわいもないことを二人で話した。

最近聴いている音楽の話や、英語の先生への愚痴。そして最後には決まって「またね」と。

最後にはこの「またね」も言えなくなるほど透ける日が来るのだろうか。

段々と透けていく風を見るのは辛かったけれど、それをごまかすようにいつばい笑って、いつばい会話をした。

そしてまた数日が経ち、そんなごまかしなんかで見えぬ振りもできないくらい。胸の下あたり、七割ほどが透けている日に。

僕はたまらなくなつて風に告白をした。

「私透けてるけどそれでもいいの？」

「透けていようが僕は風がいいんだ」

「同情ならいらないよ？」

「僕が風といたいから。ただそれだけだよ」

「そっ、か」

風は驚き、怒り、呆れ、しま終いには「しょうがないなあ」と言つて了承してくれた。バス停には小雨が降っている。

その日からは毎日、片方が遅い日に校門前で待ったりして。帰りは手をつないで一緒にバス停まで行くようになった。もうすぐ透けてしまうだろう風の手を握るたび、僕はやり切れない思いで胸が痛んだ。

僕の頭の中には『このまま最後まで透けたらどうなるか』という不安が残るばかりだった。

風は笑つてごまかすけれど、おそらくは消えてしまうのだろう。そう思う根拠なんて全くないけれど、そんな感じがする。

なんで風なのか。なんで消えるのかなんて僕は知らない。ただ一緒にいることで、お互いの不安を見て、見えないふりを続けた。

風と出会ってから、もう既に二ヶ月が経った。その日の風は完全に透けてしまっていた。足の先から髪まで。

君に似た雨

文字通り透き通っている。

もう僕は風にふれることはできない。

風は「はは」と薄い涙を流しながら乾いた声を漏らす。
「もう悠真と手をつなぐことは出来ないんだね」と。

僕と風、どっちが言ったかは分からない。

「キスしてみようか」

僕のくちびるに一筋の雨が流れた。